大寄嘲晁馬

武者

へ13
1270

へ 13
1270
巻
へ 13
2050
2

り
住嘉

月雪花恋風流

本朝無双美人

かりよせ　ひとり　むすめ

渓斎英泉

松葉堂

大雪の駒馬

弐編

一 天王寺がらんづくし　女まんざいは　丁

一 男もげづくし　女もげづくし　女まんざいは

一 おさん茂兵衛　女まんざいは

一 たきものぢくし　女まんざいは

一 地名尽上　丁

一 地名尽下　は

一 たしつまえづくし　は

一 大笑おとし噺　は

一 麻馬の子龍　上　は

一 廉馬のゑ 鶴 代 四 丁

一 大笑下れ 悦び 同

一 蕎屋ちやだな 同

一 佐三郎人参風呂 わとし 彫 同

一 糸屋大坂 ゆふの人 海彩 同

（かりんだく）

今日は夜長湯さんかまへ登る屋敷長湯
さんぢやいふ長の塔く会仙十の世
たゝ仙ふかとこいふ白ぢうあるに行の白へ
かつとけかへてやぶふもろのぢやへ世帯と
いふものハナ西つの残でもきへねふて

て来ていうやぢでかけつやゆ行まやへ食べ
まふかまへ（ぢさ）ろうの来ち猫のいれば
面へ斗りコレ面へ（ぢ）ぢがりいつでも二言う
のぢうぢやちゆとハ浪かきれまるの耳
のぢハ泊ぢのいうのハナ（へ）食堂の悪いつぢのと
ちぢ子かまんう（へ）藤堂のうれ祝ぢ成ていて

やいたう地の井戸角へ行のうぶやゝサイナ
かまへの角へ行くと春ちるの逆沈のうふふ
手ゝうう舞とうたうもがかまへの出ちや
涅槃のみくへたのうふかう雪美ふかうて
ぶやゝうたうふこうけんとうたうふ仕
まいかや紙子仏一つかぶやんと経堂図

ぶやナヘコリヤやい夜かうふ回廊がへのこ
かうがかまこが祝の鬼井とあふさと云
でへかーまくこ十六時堂ふかてゝる
かまこぶやかーまくこ時やゝ地義へかい文
殊堂ちんぼふセイ女房へ門の元三ちゃる
角へ大師かの世宮のかくこが境の逆め

人まつ石の井ゐ
でぽこくの石
まにあつ奏井の天神うでこそ
只か門美八一ひ
れサちりやの
河山で採てこ
逢坂見川の
かりの奏
浮沈うの
てすのしさん
ま今の
こぶ清

のけこてんぢやそふ者へハヲ三時せん
ぢやこおヲ〻ヲ〻ヲ〻

○そもしまは座敷ゆひ女房ハ町の女ゆひ或ハ男ハ
男のまげづくゝ女ハ女のまげづくゝそけんくさえどある

一そもこハなんけの帝事ハ帝ハ髪ハ髪ハ髪

やうなぐあいで仕ていまだ
そのまいもいまこの酒の
ものの人たちでいかれるう
女　男
かたそのまま
おうかたぐ利くつか
ふやうがうしの
ふやうがうしの女房ぶる酒でう
やつこそと奴酒ぶるかぶる大
でふつ
手柄ていうかまれるまま酒をるのじやあまいまま
とうちがう
思遣こ所う知こ物じや男こりやそのれ
とびぐち
とこがど酒でこの酒ぶるどに
まこ
とこがど酒で酒のこのいたらぐ養このかたくと

あるけがのの家藤合夫酒のまあるあ女とふ
女　男　女　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男
あのあるこうこ新そるぶそ女ぶ夫のチ口ぶ者ぶ酒相夫
あの　ふく　ふこ　こげ　じや　あれ　ふこ　ぶく　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ
もの　ひぷう　物こ　酒　じや　かれ　ふこ　ぶく　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ　ぶこ
あの　酒　こ　夫　び　酒　酒　ど　勝　う　め　む　こ　ふ　ま　ど　う　や　酒　結
女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女　女
て　ぶ　ま　こ　そ　ぶ　酒　う　ま　ま　そ　う　ま　ま　ま　そ　う　ぶ　ま
女　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男　男
ー　ぶ　ま　か　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

はじめこと敬ふ社て者ハ女房ハ雲ゑ
のの利ハ天ふ者ハ新てハ大ものの元ハ
ふ人ハ者ハ此ハ女へ者ハ私ハ者ハ役ものハ
いるハ云ハ者ハ人ハ此ハ元ハ者ハ人ハ者ハ
ものハ此ハ者ハ人ハ者ハ今ハ者ハ人ハ
とハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ

てハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ
柳巻ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ
あハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ
たハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ
の元ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ
ものハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ人ハ者ハ

ほいとも、いうぬ女房のうそ八くへもそでらのうの
らぬを横くかもつまとと解て仕まへおきされ女房
へのいけまとどまいちて人ぐ者へだりゆうたたらえ
らがをまをもたをゆえ、ちくれ者おきされ者の門へだけば
らと仕て来て門へ戻と又私そのでつまりとものの
ぎやつのや商売が髪洗ゆしやとて戻へなん人繰やあ

○このみぎ[illegible]げんを
[illegible]ごうてきこうぼう[illegible]
れいのうじゅうこのうきぶんなぞうま
いのいのなさんかれものとでも
きこうぼうぐつちのでもこうでもい
とぶうあつちれおもりけいこうぞうのかの

このみぎ[illegible]女の一

[illegible]のこうぞうのそのうしてまもなくこのの
あくまのうつのこうぼうやかふうきれすべが
れもうれかすすきこうぼうれうれうれうれう
こうぼうかるうまれだもかのれうこうぼうて
えひとうへもとのかすとうけていんをな
むつけかぐうぐこかのいんまんれかのの

人さまの金を借りてまいりまして後
年三百十日の内に三百日の十日つ
い中のもどしまする約束ひまをとって
行の者。人さまとしてさるかくまする分
あいまいの人さまうの約束をひまを
あの者。人さま様へうかがいまへ

の大師様の代物まるごとへ渡たくし
とのもとへとしらいごとをもうかがいます
さげ人金をぐりひとまで巻ごとあさ
人さまのものもけのうち月でたのひ参詣
味の大師様へ願かけひまをいたさ
もとのもくで八時神様へ詣でまで

所門流のうまえ八月のあもうのげ
八でゑがゆるるのゆふ〳〵モのあ泥ゆのゆ
こちゑのちんぽうゑ大さい潮ゑちのゆ潮あ
ゆゑと云これば〳〵そるゆゆ長ゆゑのこゆ
人のゆゑゆゆ代物ゆ大小ゆゑ長しゆ
ゆ泥ゆおりゆゆゑ女ゆ支げ人々なゆ人々お沢山ゆゑゆ

大坂たまんやうの本橋南詰東入
辛安板

○ものくさ物語

元禄こなまの五月廿日ごろ成
て西京にかへりて西ふの白毒で西ふの女ゑん
るとびの毛鞠紙の紙緒てたゞとべらへ金
さりけれあり行ゑ女の心おもてすの男コ又
るれ利体さふ物ゑ紙ぢとへうゆげ紙ものゑ

かゝりげ紙のそせ紙ぢられ紙ぢくゑけれど仙ん
みもかのれゝふの四ひげ紙みのふ紙ふ紙ふ紙ゑ
あるまゝ行ざこ紙ひとゝゑるとびだゝゑ
ゑ女へ雪溜せそのゑゝゑ紙ゑ物ゑひか
されゑ移ゑ紙ゑ町ざうゑ紙ゑ女ゑにべに
ある紙緒黄てゑ川ゑうゑ武ゑこゑ三ゑくゑのゑこあ

よ世間までもいらじとかいうべコリやそか
いとこの孫人のうまでうぶぎりだと云
つらいでもよいうへ中切こされてきまふさ
ぐ。三つ歯でもどてくと。駒げこ八百
あんまりきやべるとぱじて角げこじや
あろそよ女へもでも歯もめいろかばへ

いかいさんに粗ねぐ三文のうこうじ
うそのうまぐこうまつうこかばかまへ
こそるいうまでもうまでうぶか
男コリヤ竹のうやきやまうれかぬ緒一じ
でもぬ文さへあうまや雲ぶ女げこや寿
ほうへんまで拾あとで下兎せくこの

よふふうけまへれど。あのれこうごとふまつるぐ
からのでぬいひとやこと長ぎやぐナ女へ泥
人長ぎやうのひて長ぎうちぐふぷこしってく
節季へ勿論。あとがけのさいらくま
でこめつこへ慢ぐわこんしつまあるぷは
称と打えが緒ぎやそ（男）コリヤおとこと

はくとそどすと汚名げこのおふれでも五
こうあんまりはくあるやぐひこうけも
かもてこそるぞよ　とだんくけんくがひ
ぞふかること人長ぎようぶあいこう人かこそ五
しへ下ぜうふおもあへ行て長履ふそぐ
お銭ぐのふこあること今りもどうこう面へ宮祝

の花ぬけたるぬけれどもあのさしみ
歯へげさの歯へ合ふモヨ仲上と陸（五引
○ひさ外ろてゝ合ふんく女まぐんくへおどけ浪人
沢山と出座ひさ水めゝ浦晩ら拍てら下ひ見又
藤だゝ〜おどけ絵文そく座にいらの仕組
彩飛っておもゝろさ水見又沢山ゝ板みゝ

大坂たとんぼり日本橋南詰東入
平安板

▲攻コレ 牌そかこへつゝ
ひだりへほくれの松に
かるとゝまいたそうとさてゝうちと出ぬ
の柳そかこゝがふるひらゝゝゝ三ゝ人秋
ゝ山おさかる我のだぶんかゝたてゝゝふと
こゝろでそだてらまゝ出れ者でもゝ出のふ
うとゝいろくあくうそゝ見ふ猪それかゝゝ

七まぐらいか枝とそうまゝかゝまんゝ
とふそへ間そいでまゝどゝもかゝほこゝさく
のゝ油ゝうちと猪ざろゝかゝも仕てゝけ
人とゝふゝゝ十三壇ぐらいと枝とゝうく
うそゝたくゝゝ山ゝもゝ五樣のゝとゝふゝ
にゝまゝでへそゝまゝゝゝいとゝ仕まいへ

ひとまでたりあんど。秋ごうふおとへあの
蝶。まるけ。柏ほども用ひも秋へかん
ともあふ業とゆへども人のゆふぞふとい
をくと菊ひにたいはを川やの三陽とう
いふ拙女ところ裏表と成とかくぎくの方
へいてへかいあるよミやげけうえん物ちふう。

いろくの和へゆきさていえぢとさびあさ
まーへ分とかうことのうのあまをいふぬ
ひふ秋のさぶもあちもの時もそる
と子ちるを出てうへひふうあさをて
までも悔かんぐるうへふんどうと清表と
いへども秋へひの作ぐーとらひるぐーの

ゆふとい久ん者秋とまるも蔦紅葉
ふたうつゝあるゝ鄭まこのうゝでも成こゝゝ
ちゝんづゝ三休のかゝ栗でもかうふうとさ
んだんぎくと付る間おひくうちも荒稲
づゝめゝるべかれゝ物めんゞ酒竹そゞ
と春めゝづゝもつゝ戻つてくゝこのうゝと

ぱつのそでと初ちうまでまゝだんくく
松ばくゝ更とゝアそなゝ雅ゝ相ゝ山う
いちふ稲ぞもゝるさゝめれゝあうゞみとえ
たりゝゝゝゝのゆうゝ月のこうく
いてゝむちんといひ金ゝ帝とりひてゝ
くさゝゝゝふゝめゝゝ久ん志奥づくも

かいかめそだまもとのさめがイヤかめ
ぢさ魚ぢもしまへでぱふひとあるこ
いだうもこまのひかまへさ魚のさめりと
ヨかへまつさくめのぐうとふ気だを
どごろうませんかれうふんと沒めて今ちを
巻ふこ達ごこさんたぐ楠の月と殺ませう
上のつぐきの下のまさゆざて以上

地うと名者上のぢう

大彩板

森園軍光

大坂ちさんばり日本橋南詰東入

本安板

たゆ多ず
ひ合文る

おごけ

下の春

松旭斎春書

▲まつのつゞき

まつのべもあらぬなこんくゝ
いまゝをぞと云のゝらかまつばかをと
てらどうるかも程づゝ美しけてもふぶん人
なつかれぬ物と思ひて緑の濃うゝ嬉しくて
なほまれなる者でもちよ〻ぶ〻ちとうぶん雑
どうつめたりびんひかりとてなでける

もとかをと愛深ふふそんかひうすみを
女房ゝをそて扇ひてをををの濃緑
ぶうねゝ波ゝ為の川橋をそて雑
の家もなをと扇をそうう雑子もうぶてばまを
とそのかの西ゝ撥の沖縄でゝ出ねどう
夜ゝまてゝ夜ゝ為車ばうぞゝせ

めんどくさい　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

とりつくしまもなく　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

まるでのるかそるかひとりぼっちの　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

支離滅裂　ちぐはぐ　こんがらがる　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

かくしきれない　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

しんぞうだま　イヤ　私も　もうよそでやる　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ　なぜ

いやみたらたらもうもうくどくどくど

内ゝ拵ごとけごとの国でまうとうゝ入
おひのまそうごとへまでうふの蜂養川
そのぶんとも松竹樹とせのごとまうう
ゆまとかまえ〳〵漢でごまちとこと
たるかもひもひもまつ月ぽう書後の月
これゝふかのえのうとうれんぼのかた

漢ぞと十二月がそのあのうゝ余所角ゝ
げーたふかの色てのうゝふぞやまかとか
あかゝのかとへとの後ゆうばよへ もうる漢
ぶひやうへ漢ゝうのと稼ひ多秋と
やとの多へがゝれば〳〵ぬかたうへ
へかゝと外そへ〳〵そのゝ考へうへを

こうひも浮かれてこれぐたびひ
お蔵のかれぐむまで夫婦のもけ
んぐそうでしやべぞいろんあのことを
うさうさうしまあ
ひとこの巻出来はめぐろうけてあとめら拾
出来ぬ有らずとあかう軍光の紀元二千五百年

大坂乃とんやう月本格市場森八入
月亭生瀬作
本安板

○えーりえづくー

そもそもこれ[illegible]ゑむーもあまの浮
はしりお姫様とべ[illegible]おうふとそらとうのも
ひのこへみづぐるまたけのいおとこ
とうふかもひっけのとうぐいかつふけの
かうふあぶっけてあぐの紙ふをとうて

文字さうよ邪のおーたえん初歯
のべ紙といろはは文字のかかだしのイ
四くとおもきやうまな板づふかたひ紙と
かんぼ出又でも落又でもなぐ茶カ
とうとふのうはへ鬼千ぐるのをせうふ
おゆ火うち第イヤくはでいとんすうく

ほんとん屋の杓子屋
杓子うかへぬ家もの
くしうめんぐ〜迄屋にかうもぬり
おやこ多ゆまる柄杓もゆ桶杓もさ
じのち猪口もの人のそまいはあいに
ゆとひやた瓶のいっけでそくとうさ

手桶や片手おけ二人まじりの下を桶
人のとふひもあ坪やとてれおちうえ
やかべでうま人さこまるハ方や又剣ま
ひでちのつぽりとたきはらまてのい
ぐちひとせ乃人へえぢさんせかんな
かま〳〵あく醤油さひぢう郷麻のう

へまぜ三人の中ごうを縁いうさるを
たゝうやはじやテ味噌こゝぬけ分
づゝひて去あらさら去られといふ人
うその川をづで業みして結まふ手指
げんくを片は吸て中かそう一寸寝ち
このそう辛そうたふ湯気のせつらや

ひのくを人木のそれ中ふるもあで
けふもりだち運人ふもりりそだ
人く布巾そんじやうしてそるるか
そ丑火吹作吹つけるはどさう重さ
つあでさゝもうさ孫だちそや六寸のふ
一とかりあさ海もあらた業びんとてか

うらく頭巾うちぬぎの鍋も釜も
ぞめのまゆり絹縞せん孫人縞まんね
んも色かぶくとゆい新
○尚ひいきの生徒大人の似ぶれるおどけ合
のんく落だめ　おいろく　おりんさ
幸めまこと出板いくらくいるゆひいさ
これ　ひとめら花ゆ笑ひのほどなき帝こん

えーりえづくしはり

大坂たさんがり月幸福あ
福蔵清森八
幸安板

○相場

▲或人金まひして金ぐうの方へまらあ
ゞひて居まひしあへわるさふあんじゃら
しやの和へあるさ（モシどふぞその金）
とさげてくゞまはせ人うそまへふうと
いてもひとうきゞう并（まそ男）（それまでもこかい

かりまもとまとに乳ふうう并（まさいしや）
さゞうひかきんかどふで金のうあう
あゞうきゞうへあるうちぢや

○穴の神宮

▲ひかうこて狐（やゝ）（きつね）のう合（あひ狐）（コレさん合）
人をひやう穴と家（この）（あな）（いへ）ごしてくんだまして（ひと）

やうふぐあめのいう[杭]そまものいうひは
ふまとそうばかやとうふものいうあと
だまそといふことぐあらしてだま
むちぶんん[杭]ハくこそんあうるしや今夜
いてかやそうふそうんふとさやくに化
てかやそうひあけのあきそうくうう

[illegible]

[杭]コレとんすけかやもとしもだまそのれか
んそうるぐあやとこぐふいふものでイヤ
やりむそうぐまいい究へりりてきする
○いつるかー
成ふるのやれうんぐんふびいぐうで
ちらくうあのふんぐやうだーとめ

るとあるてすんぐそたべすりて（ゆのこ）
まいあかむとぎやあらゆまとぐ〜
ぎうつてあるぎらぐぞもちりとあて
うぐうんとらのぎやとうけたくかて
んぐぎやうとらうとそうとみせのかと
と（モシ）そからぎやかそんかそのむとあ

いうれものでぐろうまそ

○ぬうらぬうと

きる和（とこ）のかみ（やま）まぶあふあて（かみ）（コシ）かま
（かんでせんぐろうく来（さ）てぎやからの
ぎや（男）（フシ）うーも（いら）べんゆとらけ
まぐもぎいらあんそでちまうて

藤だのー大笑ひ

春うもうそくとうの人ごや
何のそんかるとぐらうまあとと
ぐあるものでそからおるのらもと
うう粉くのるとあらやけうぶ丁
とばーてうんかるきりさぐうるくと
ひとつ外ちぶけそこーあるだかもとくがいうくこれやうとうとうれのとん

▲サテ〳〵かうらいふるものせへ
うゝ世ゐるむあるのあるいるものぬ
ねごとをて森るのるふまでらゑん
ゐ森人いらわこかるまでかゑやうう
ひゝけてまゝ月あるとゝ雲が
ゐむ方ゐ雲ゐやゐ女郎ゐ雲と云雲

が人ゑるゝ雲のゐこれ方へかゐま
と云山ゐでけてそかゐの前ゐいひう
かりの洞穴ゐでけるそかゐ穴ゐかゐ
ゐたいとそ十ゐ六ゐいふ荒三ほまでの人ゐ
ゐ性ゐ無雑ゐ月ひてさんゐとゐるそ
のかゐ人一通の山ゐ国でゐるいそ一変ゐそか

ら穴へ糸を結くさいを人に持
まゐらせうとて後にうら長持の日
寄の進せねば人そう為てくるとつ祝ゞ
建て下さうと家うゞ義ちこ祝ゞをや
穴へ引込まとて位ある人そのお山がだん
くゞりまとそこへ行みその川と云

川がでけて向ふあると云水が作山うるき
いでるそうそのの川へえまつりれゞ下
交下流えいて前お丈ぶつと云ものでか
人ゞ多くそのの川うえ舟と云
舟て浮めて向ひのこへ行くると
そ和と云人家と云家が栖で立住居

七夕のたなばたさまにあげかるつとゝ歌で願ひ事
をしたためうゝ書ふかん歌やるうゝえ
まのたうかくふいやゝ光と云ふ光かた
ちのぼつて女郎寅堂がかえ
かつてもやゝえんまゝ後とのびゝ
と云ふうえゝふと云らしがゝ下つて

やたゝふかうまやゝ
うとかのふてもせんなふたゝ
去りふこめふらふのけふふゝんぜひ
たあり鐘とふ鐘とふきうせね
べけらふふるやまんとふ母でかん
おやかふ見ぐかけかふとふつ

あるるゆうふぐのつるかふぐを
たふりせへ是ハ仁義大義うのこや
ふやで孝貞二字のかふぐでかん
おやうふ一九かあんぐきひあれひ
ぐおやうれたやのひたくさんぐかんぐ
るとうの今うふぐやかぐよくやさへ

▲その日たくせんのいまく

えまことうせいのぎやくえいどもを
かやとかもつぞーてちうとぞひ
ぎすたかのかるゆ川（かげ）
ぞかやいてもかーどみえみえざ
とえかさぞいけもせぬうてうまう

りてあいつかとしんのはまているこ
ぬまとわぐそのうねぬまてあぐと
もせぞかふわいのうろうゆひごこ
かてはとそひおやみうんべんせを
しくあんもこいとゆいてうこあめ
みるのもえぐどうのひあのまえど

つうわこんでもんさらやくるれへ
まぶぎやとおりふなさやくあふうつ
たうへかいゆふぎちよぐちくんいなえ
うくかごこんかんたぬくぎつねが
ゑふもせよけいせいふまてどあつて
百姓へかふんどくあてあをを

つまやかのかへひてちうちちちだが
だうのうらとけのせらめまてぐうとの
くびうへちとけりうあるぬふんべつか
うとうくせぎやうとひふけてあ
さだんえうらさのうふられいどえう
ひうまくひいえやくうさのあたまく

このてやで、かんぎやるゝてうせたけ
だいをゝくのふひ、あをこいさゝうでも
かこころと内(うち)のふう称とふむゝゝがたく
さんゝるらてやゝもてをばかやゝけう
だゝのあゝとうぢゝこゞるそのとき
かゝつけちんるいうあふてどふちよ

うのうと云ちんのうのうと入てもむ
ゝのたてけかゝ法ものゝゞんと
のむゝゝさふふものいゞちようれや
かあるちんぼううとこと云(いふ)名(めい)やく
のとふあるせう称とふ称とやう
だゝゝてそをとくをべるとうをふむ

一の祝ごとは（のうそうらいづくし）
くもかんぎんかなめてんこうけかや
かうくとうらかふくてなまこと
のみちとそこらぬのうぎいぶ
人せいぐてうせいぐさかせくく
ひさ外おどけ彩色（しんさく）ある一本沢山（さくさんこのつのどと）出（ざん）

大坂名どころ（おうさかめいどころ）南流亦八　本安板

ひとつぶらめ　ぶんおくき
いつこうのひとかるとこのまね
えとらまてうひぐらぶやがられんうと
もぐうふかのつてえいるをへぬわ
ちゝあかとさぐうてぐくとけへこめだ
えやでうけいるふぐのまたぐう
だをさびふちくとかう　うとごけの
うふかみのうるとえでのうぐひう

下のよろとび　ちを

ひるもをるうるかをるぬらうけべ
ふいてまうをるぬうまくうかう
う人ハだをちうらまをうをくち
とくうをへかどをうんかべのきけ
ちううふもういうをうべまくうふうを
おしておくをとえこうかぐるを後
まくうをうけちうをてのうれべかうるをを人
やねのふーんかあうぐちのれうら

いがもあついろもこぐろいまさいまん
ぬらりといれてだまかまこうり
あろい物ぬふくだしてそのあとで
そろくとふくぬうぶくろうか
まひとひとまとふくれべいやげるを
ぎあうもふいれさそだあうめへ
ふぶめりでつるまつひひるふ
うへいぐてつむねうるを

ひとめへでそうとおびひといて
かるくやつてかるをあちりへ
めひでかまぐろをうへにくちあをて
かめてふきだをあやくへのふを
ぢえつけてめびひでそをくやとへ
どうめふくつとあるふづみ
ぢふぢえをあておくれいかるうたと
まいふちせげむあつぐへのくし

◆そのうちまつもせうしあせうして
のりてもたつてもむまのめのぶん
◆いろくろくあくさをおのものでたくまゝの
あるせてうんたさいのあれやせうろう
◆でるゆへにぶもいあんとかさらぶさを
あれゆくるいかやけさうれい
◆いるこてうんて又ねいていれうけて
あくえいうことかのふいけぞか

◆それそこてもちつとぐひとちうふいれ
おゝてそくれとうふをあくもち
◆ふとらのぞうへうのけぶあうさうをを
うのくいうよてえいるいゝつさ
◆あゝるけていふかどかとすのつけぶ
ひつるやうまそふかあゝしいこ
◆うゝやもひやあびうぞつけうとぬび
こるぐあぶるいかうやまうか

▲めごうてやるしのんだふいてめ〳〵
▲奏あくらうのいろ〳〵めろさあと
▲むそめぐろのうかうであふてぜひやも
ひろげてさ〳〵ろひうさやふだち
▲あいそめてのちいろほこいもまし
えやきうけうろこんやいへあげ
▲まく〳〵までたぜのうこぶこうろさ
くろびきあんまやぞうむぞで

↑のようこびにう

大坂乃ちとんやう日本橋南詰東へ入

月亭生瀬作　松旭画　英之書

菅原子屋場

彫ぞ

大新板

○國の者國の者

清ましの蓮根が来て千人堂

夜ぜんの八ぢくさう屋へ新米の蕎麦ぜんの蕎麦

多のてこや清かされて新へ丸ごと来み麦

茄子といふ所へ新へ丸身ごぐん茄子と清

かされたいどん物でござる升仙花さしこ

ま茄子と清つくぬる味噌が腐とか付き傍

て来しま茄子へいびしと漬漬ぶかぬる味

噌が腐てハけまぬとやぜんぐぐん茄子と

清まつぐぐん茄子の方ぶやと味噌付さ

所がちのうど酒糠ありまも

○大　雞　進

◆先生食べいめくそだんごゝ作り私も
明日へ親戚の祥月めへ日こんやへ行くなら
無でらの本めへ新のものが六ツうりまゝ文
めへ今ゝ年人の新のてゝ子文ゝだゝ
と思ひまゝヤノ文句へ名百こと凡ざゝ〇ゝて
コリヤ〳〵凡かゝり又親へ九鳥木しゝまゝ茄子

ちがうまゝ木ゝの色とゝ分精色のもの
ゝりまゝそといへへだいゝ人巻ふとめゝ雑で去
やう者人蒙ゝかゝされかへ

○芝居天狗

◆蒼糸のてゝ子や物ゝ私ゝ三ゝ病気に
てかゝまの病人ゝやゝ余病人ゝう

仕てもいうんむのゝ種えだやかな病者
の門ゝ前に梅はとび揺へうる世の中河
とて松へうとかるるり人女房祝べ將へ殺
こそこそとぞと云べ女房祝べ將へ殺
て為ぶ物の為病人ぎやかい
○犬の糞

▲このひるゐ犬ひ河ひのてゝとやへ祝ぢの人
が君まゝくと後ゝ養て来さて来る紙へ
とゝふゝてゝやれ犬のつゝ人ゝるそそる
とゝ人ゝ人ゝと後ゝて祖父さん人ゝ
くで乾とてゝ犬のつゝ人ゝるそゝ松
尾屋の息子のゝ小ゝ人ゝ犬のゝ人ゝる

とうてい〳〵そのゝ大のちんぽがスウとぬけ
たゝ三人の子供がかるいそふなねこちんぽを
かゝそうけるおめの子供をこゝのゝ多
いうそるこ達ゝ〳〵モシく老ゝとぼこ変
うゝ岩はまがたごくでさうゝ松三貳ゝ
ニリや蕎麦うへ〳〵エ物はまうぢや

○神おろし

今みやの我さん狗ざとそこへけてあつけ
ると廣田の神さんがほうけへ廣田こしく
三郎兵衛どのどこへむけてゆうれもそ
と大さかこへ戎ヲイノけふへ屋敷
川う三郎殿の神へ行ゆうと廣田こしや

あう殿が狗たゞ色ぬかさぬう戎へぞ
いぶんと進ぜう廣田たいも狗たゞぞ
さいわと、へ我さん供ねうほーて行
色ると廣田歌さんもおかうりてうん
ほうがある

○浪速と蓑

▲延三びいさと秋童びいさの二人寄て
芋喜だの〳〵と言ている所へ其ものども
に〳〵物喜伝師が来て喜と三味せん入
と浮〳〵始めるけるぶんく毛実川
延三郎イヤヤ〳〵為の方さ負し光氏
ぐ〳〵の秋ひ安屋けて下さる和ゝ

と云こと秋童びいさの方がむしてアア
いとおくるとあるのく〳〵毛ハ行長秋童
釈人の張なるひ村雨丸ぶ切味いま
手ハ用ハテ天晴の名伝ぎやようとこ
とぶりやびいさの方ぶ安ろて〳〵えるめ
てヤ延三と待〳〵て居〳〵イヤ大ろか松

ちゃのつとをてかり〳〵イヤ〳〵ごうはら
はなく〳〵イヤ〳〵松ちゃやまつ童くとたが
ひせう合ていると物まね〳〵ヨヲおり
ちゃるとはかうかのゆくゑまて

（浦）花男

うつがの治三子と人参ほうの伝ちうが

連立て二つ井戸の清水清へ岩わこーて
夢とゆきさ〳〵われかこ〳〵でが人かくまと〳〵おれ
も一人でが人かくまと〳〵おれ
ゲヨヲ夢てかの〳〵ジヤ治三子
て立て治三子ちゃとい
老風ぶへだと知人若へ

空にどりいちづ大きいのぞ（法三寸）あれづ大きいイヤおれの方大きい（そんなぐらいそのの方）たたたた

[illegible]の不十[illegible]の[illegible]の人[illegible]ふて[illegible]
町と[illegible]横と[illegible]の[illegible]のもとれば大坂のけの
こもあるそ[illegible]の[illegible]が来てやかまし
まで家のこもるも[illegible]大坂も[illegible]ぬが多
大坂もの[illegible]うかと[illegible]大坂の[illegible]と
なかねれ[illegible]あいと家のさこ[illegible]なる

[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ひ
[illegible]の[illegible]三[illegible]の[illegible]
[illegible]三[illegible]三[illegible]三[illegible]坂や
三[illegible]の[illegible]人[illegible]ち[illegible]三十三[illegible]ば[illegible]余
の[illegible]三[illegible]堂の[illegible]ば[illegible]三[illegible]三[illegible]三
十三[illegible]あ[illegible]ひ[illegible]
[illegible]と[illegible]大坂の
[illegible]ひける[illegible]大坂の[illegible]

かぶん橋くちづいしぎ
るべくのこの長
じめづつ紙屋治兵へ
神橋ちかのかう
の橋ひさのの深川八幡
男ちかのうつ
ぢいまもの宵の月
ちたる雲ぢ
ち橋ひさのの虎ちうり
さもが
ふ方のがいとちやこ人
虎ちうり

ふるのぶ表やしいよぶりまもやいよ
とくしぶ表やが、かまのうもうこ
表ぶ表やこうぶまぶ夜病ぢうのうませ
人

○神の松樹

せんせい夜の松の色所
ぶ清ぢうの金ぢう
ぶ八幡ぶ清ぢうまで

コタノ花ハ梅ノ花ニ梅ハ桜ニ桜ハ
世ノ中ニ何トテ松ノ花ハ人ニ
ツタリヤ何ノ人ニ成ラウマシ〻〻主人ハ梅松桜
ト三ツノ花ハ花ノ王ト樹ノ王ト樹
ヒトツノ天ラ木ハ〻〻ヒ樹ト花ハ花ノ王
ゲ花ハ花ノ王ト樹ハ樹ノ王ト主人ハ

の意ハ主人ハ花ハ花ノ王ト樹ハ
ハ遷ヒ行ク梅ノ木ノ間ニ住ム人
ヒトツノ梅ハ花ノ王ト桜ノ木ハ
花ノ王ト松ハ樹ノ王ト世ノ中ニ
一本ノ木ハ木ノ王ト連ウカヒ云フト松ハ
世ノ事ヲ思ヒ出テ流シ涙ヲ云フ

とて松うしをかうふんだゆ[illegible]
いと俗て[illegible]とかうしと云ところ分つさ
ゑが[illegible]の[illegible]信うい知ねば[illegible]
人とゑ[illegible]り人の学[illegible]生ごろの[illegible]物ゑ
とい[illegible]生もいさぐ[illegible]
外えち極でもゑ[illegible]人

大寄噺狂歌馬

月亭生瀬戯作
友鳴杏畑書画

弐篇三篇は編と迄つゞけて出板致し候

紙篇三冊大本にて美しく出来彩色を以て
改めず形本と仕立ゆ板仕入右出来の方根一冊づゝ綴合
本出来写何文孔本屋大人ゑ迄ゑ美しく小形おゞけ
の本安板とら作下ゆ書孔本屋て出求めら被可下ゆ

書林

大阪心斎橋筋順慶町南江入
秋田屋幸助
同道頓堀日本橋南詰東江入
本屋安兵衛